

剣客選信

明治剣戟郵便録

帯刀古禄 Koroku Tatewaki



アルファポリス文庫

<https://www.alphapolis.co.jp/>

目次

序

5

第一章

ピストルと郵便脚夫

14

第二章

博徒の雛と老剣士

42

第三章

維新越しの恋文

62

第四章

媪おうなと猫とおひさま

87

第五章

高砂たかさご連理改曆れんりかいれき之段

123

第六章

浪華なつわ裏花街うらかがエレジイ

148

第七章

お尋ね者・片倉隼人

188

第八章

昔語り（前）

224

第九章

昔語り（後）

255

第十章

箱根峠追捕

286

第十一章

ドライゼのゆく果て

315

結

354

序

白く立ち込めた霧を掻き分けるように、きんごう 険な山道を若者が一人駆けてゆく。
はっ、はっ、はっ、と弾むような呼吸の律動は力強いものの、どこか怯えを孕んだよ
うに絶えず四周に視線を彷徨さまよわせていた。

しつとりと濡れた礫こいし勝ちの地道を踏みしめる足元は草鞋履わらじきだが、若者の姿は赤い線
があしらわれた濃紺のズボンに詰襟の筒袖という洋装。そして頭には、風を切るような
形で正中に折られた葎山笠むらさやまがさを深くかぶっている。郵便制服だ。

笠の縁で凝集した霧は水滴となり、若者が地を蹴るたびに零れて落ちた。

小倉織こくらおりの制服も重く水気を含み、五行ごきやうの摂理よろしく深い黒色を呈している。

登り坂の勾配が緩み、森の口に差し掛かった。

道はその奥へと続いているが、蟠霧わたかきが白い闇となって旅人を拒んでいる。

若者は注意深く周囲の様子を窺いつつ、意を決したように霧の帳とばりへと分け入った。

森とはいえ、すっかり葉を落とした木々の梢は充分に光を受け入れて暗くはない。ただただ広がる霧の白に、足元の道と巨木の幹がぼうっと浮かび上がるばかりだ。慎重に歩を進める若者だったが、森の口から異変は既に察知していた。ピリピリと肌に刺さるかのように放射される、悪意。

二つ、三つ……四つ。木々の陰からじつとこちらの挙動を窺う、捕食者の視線を感じる。それゆえ、若者は急に降ってきた声そのものにはさして驚かなかった。

「苦勞なことだ、郵便屋」

野太くも浮薄な声音に、あちこちで追従の嗤いが起こった。だが濃霧と木立に反射するせいから、賊たちの正確な位置は判らない。ただ、若者は自身がいつの間にか四方から囲まれていることだけは理解していた。

「金目のものは持つておるか。無益な殺生は我らとて本意ではないのだ」

先程の男が鷹揚に声を続けた。

だが、その間にも他の賊たちがじりじりと包囲を狭めてきていることを、若者の肌は鋭敏に感じている。

この山を根城にしている賊なだけあり、霧の中にもかかわらず彼我の間合いを概ね掴んでいるのだ。

「てめえらかよ。郵便脚夫をなます斬りにしてやがんのは」

自分の位置が知られることも構わず、若者は声を荒らげた。震えて上ずった語尾を眩すように、さつきよりも近くで再び嘲笑が起る。

「なに、頑なに抵抗したのな。お主も持つておるのだろう、銃を」

既に腰へと伸ばしていた若者の手が、固く冷たい銃把に触れた。躊躇うことなくホルスターから抜き出し、撃鉄を起こして眼前の白い闇へと銃口を凝らす。

「言っておくが、余程運がよくない限りはまず当たらぬぞ。その代わりお主の姿は手に取るようによくわかる。我らが霧の野伏と呼ばれる所以、とくと味わうがよい」

若者の四方でざりつと地を蹴る音が立ち、賊たちの走り懸かる気配が殺到してきた。もっとも近い足音のする方向に狙いを定め、若者は銃の引鉄を引いた。

瞬間、破裂音とともに発砲炎が明るく点り、発射の衝撃で周囲の霧が同心円状に押しつけられる。一条の弾丸が空を切り、濃霧の山に砕けた。

が、賊の足音はなおも近付く。

体の右側にぞわつと肌が粟立つようなひりつきを感じ、若者は咄嗟に身を振った。その直後、元居た場所を一筋の凶刃が唸りを上げて掠めてゆく。日本刀だ。

白刃なる諭えを裏切るかのように、霧中に映えるその刀身は禍々しいほどに黒い。

幾重にも反響する賊たちの足音に幻惑されつつ、若者は立て続けに銃を撃った。しかしその直後。引鉄にかかる指に怖気を感じて無意識に手を引いた瞬間、斬り上げる太刀で銃を跳ね飛ばされた。

丸腰となった若者の前に、刀を担いだ男が立ちふさがる。濃霧から溶け出したような凶顔には、おぞましい笑みが浮かんでいた。

「いい勘をしている。斬ったと思ったのだがな」

ぼん、ぼん、と刀の峰で自身の肩を打ちながら、勝ち誇ったかのように若者との距離を詰めてくる。

「なかなか骨のある男のようだ。郵便脚夫しておくには惜しいものだ」

「山賊のくせによくしゃべる野郎だぜ」

「この稼業では獲物と話すことなどそうそうないのでな」

「おめえさんよう、元は侍だったんじゃないのかい」

「……」

「凶星だろ。んなお上品なしゃべり方する山賊がいるかよ。大方維新で食いっぱぐれて追い剥ぎやつてるってどこか。情けねえ奴のなかでもいっち情けねえ身の上だあな」

「郵便屋風情がなかなか言いよる。が、我らの気を逆撫でして何とする。大人しく荷を

置いてゆけば、あたら命を落とすこともないというに。たかだか書状か金子程度と、何故引き換えぬのだ」

「んなもん決まってるなあ。郵便待ってる人が——いるからだろ！」

若者の唖呵に、賊の男はさらに口角を吊り上げた。

「この期に及んで見事な胆力だ。だがな、先には本意でないと言うたが——無益な殺生も趣深いものよな」

男が、ゆつくりと大きく刀を振りかぶった。躲そうにも、既に若者のすぐ近くを賊たちの気配が囲んでいる。二つ、三つ、四つ……いや——！

正面の男が振り下ろした凶刃が若者に届こうかというその刹那、地軸を震わさんばかりの踏み込みとともに横から突き出された剣ががちりとそれを受け止めた。

豁、と鋼の撃ち合わさる音が響いた瞬間。その剣は白蛇のように凶刃へと絡みつき、風の渦を起しながら霧の粒子もろともに賊の手から巻き上げた。

直後、刀を手放した男の胸に激烈な蹴足が見舞われ、その体はくの字になって頽れた。突如現れた老剣士は、若者と同じ紺の郵便制服をまとっている。葎山笠の下には、鋭

い眼光と燦銀の口髭。

「無事か、草介」

「おせえよ！ はーさん！」

頭を失って僅かの間動きを止めていた賊たちが、我に返ったように雄叫びを上げて斬り掛かってきた。

老剣士は真後ろに回転しながら逆袈裟に太刀を振り上げる。若者は、老剣士の腰から瞬時に銃を抜き取る。練達の剣先が迫り、続けて放たれた銃弾に賊たちはたちどころに恐慌をきたした。

幾人かの男は方向を見失ったものか、がむしゃらに手元の長脇差を振り回して退路を探っている。と、ふいに若者の眼前へと賊の一人が飛び出してきた。反射的に銃口を向けたその先には、恐怖に引き攣る瘦せた中年男の顔が浮かび上がっていた。引鉄にかけた指が止まり、一瞬遅れて若者は素手の左拳を賊の鼻っ柱へ叩き込んだ。もんどりうって転がった賊の男はそれでも道を見つけたものか、鼻を押さえながら遁走してゆく。

背中合わせの形で闘っていた若者と老剣士は、油断なく残心を示しつつ武器を下ろしてお互いに向き直った。

「おせえじゃねえかよう！ほんとにおつ死ぬかと思つたぜ！」

「すまぬ。木立で発砲炎が見えなんだ。音のする方を目指したが少々迷つた」

「つたく、賊退治なんざ配達のついでにするもんじゃねえよ」

「だが草介が引き付けてくれたお蔭で無事に片付いた」

「あにが無事でえ。そもそも明治の七年にもなって山賊だなんてよ」

「八年だ」

草介と呼ばれた若者がさらに悪態をつこうとした瞬間、ぞわりとその肌に怖気が走り――。

「はーさん後ろ！」

間髪容れず叫びに反応した老剣士は、そのままの体勢で左肩越しに真後ろへと剣を突き出した。

そこには最初に無力化したと思われた男が刀を大上段に振りかぶった姿勢で硬直しており、その喉元すれすれに剣先が凝らされていた。

老剣士は振り返り、気を込めた剣先で位詰めに賊の男を巨樹の根元へと追い詰めてゆく。

為す術もなくその場にへたり込んだ男は、信じられないといった顔で老剣士を見上げた。

「ただの郵便脚夫ではないと思つたが……。そうか、お主らが……」

「劍客通信」

「では、運んでおるのはどこぞの密書か」

「それは業務機密だ」

にべもなく言い放ち、老剣士は制服の内隠しから取り出したものを、賊の男の眼前に突き付けた。

「ところで、かようなものを存じおるか」

「なんだ……紙包みの、弾か……?」

それは紙製の薬莢ぐんきょうに包まれた、一発の弾丸だった。男が知らぬ様子を見て取ると、「結構」と一言呟き、老剣士はまるで血糊ちのりを払うかのように空を切つて剣を振るつた。二つに割れた白い霧がまた一つに溶け合う間に、ゆっくりと納刀する。

そして項垂れて大人しくなった男に繩を掛け、制服の裾を払いながら立ち上がるとやれやれといった具合に腰を伸ばした。

「はーさん、こいつこのままでいいのかい」

「ああ、間もなく山狩りの人数が追い付くだろう」

「ふいーっ、助かったぜ……!」

「ああ、お蔭で助かった」

「ん?」

「いい勘をしている。草介のお蔭で助かった」

予期せぬ正面からの誉め言葉に、若者はしばしぼかんとした後でじわあつと満面の笑みを浮かべた。

「つだろお!? やっぱおいらがいねえとだよなあ! まっ、はーさんもトシだしよ、頼れる相棒つつうの? そういうのが要るんだよなあ!」

「だまれ、もう行くぞ。疾く配達せなばならぬ」

そう言いおいて軽やかに山道を駆け出した老剣士は、瞬く間に遠ざかっていってしまう。若者は、慌ててその背中を追いかける。

「待ってくれ、はーさん。あとさ、さっきのもつかい言つて」

「うるさい。それと、はーさん、はやめよ」

走りゆく二つの紺色の影が風を起こし、白い霧を裂くように吹き抜けた。

第一章 ピストルと郵便脚夫

時は少し遡り、明治八年（一八七五年）初夏――。

郵便物を振り分けた天秤棒を担ぐ草介の背中に向けて、火打石が鳴らされた。カチツカチツと小気味よい音と共に火花が咲く。清めの切り火だ。

「気を付けて行っておいで草介。道は狭い所もあるってんだから、足い踏み外すんじゃないよ」

「大丈夫でえ。旦那は居眠りして待ってりゃいいって」

旦那と呼ばれた福々しい男が心配そうに眉を顰めるのを、草介は明るく一蹴した。

間もなく午前零時という深夜のこと。灯りといえば手元の提灯だけだ。いかに二人一組で走ろうとも、道が森にでもさしかれば辺り一面は漆黒とあってよい。

草介たちが出掛けようとしているのは夜継ぎ、つまり郵便物の夜間運送だ。

少しでも到着を早めるため、深夜便が人の足で運ばれていたのだ。

「あんたたちも。無事で帰るんだよ」

旦那が草介以外の三人の男たちにも次々と切り火を切ってゆく。

そして、おもむろに重そうな包みを一人一人に手渡しといった。

「草介、わかっちゃいるたあ思うけど……」

「みだりに撃つな、だろ。耳タコだぜ」

彼らが受け取ったのは護身用のピストルだ。

明治六年（一八七三年）、えきいのみ 駄通頭・まえじまひそか 前島密より「短銃取扱規則」が布告された。

そこには「賊徒」から郵便物を防衛するために六連発の拳銃を支給する旨、そして止むに止まれぬ事情で発砲した場合の措置などが細かに記されている。

当時の郵便配達は送られる現金などを狙う盗賊の脅威に曝されており、警察官に先駆けて配達員が武装することとなった。

護身、とはいうものの正確には郵便物そのものを守ることが目的だ。

その証拠に郵便物を運送して空身になった場合は、たとえ襲撃されても発砲を許可しない旨が短銃取扱規則には明記されている。

「けっ、明治の世でもおいらたちやあ使い捨てさね」

草介がこれ見よがしに毒づき、旦那が困ったように眉尻を下げた。

その男のことをみんな「旦那」と呼んでいた。明らかに近江の言葉ではなく江戸の訛りで、どちらかというと商家のような物言いの柔和な男だった。

維新の後いつの間にかこの地に流れ着いたそうだが、今や土地の名士のような存在だ。噂では元々旗本だったともいうが、草介は細かいことを聞いたこともなければ詮索するつもりも毛頭ない。

富裕層が金を出して旗本や御家人の株を買うことは珍しくなかったし、そもそも今さら身分をどうこう言ったところで腹の足しになどなりはしない。

何よりいつも困ったような顔をしながらも懸命に立ち働き、人々から慕われる「旦那」の様子にさしもの草介も悪く思う気など起きなかったからだ。

明治四年（一八七一年）三月一日に東京―大阪間で開始された郵便事業は急速な拡大を見せ、その配送網は同年末には長崎まで到達。翌年の夏頃までには北海道の一部を除いてほぼ全国に広がっていた。

事業開始から約一年で郵便局は約六・五倍に増え、郵便配送の路線距離は約九倍にも延びたという。

もともと当初は郵便局とはいわず「郵便役所」と呼んだが、細かい地方局の整備には手が回らないのが実情だった。

そこで採用されたのが、地域の名士や庄屋・名主などの有力者を「郵便取扱役」に任命し、その邸宅を郵便取扱所として郵便局機能を兼務させるという方法だ。

草介を拾った近江の旦那は、まさしくその郵便取扱役を担っていた男だった。

いわば職を失う形で放り出されたかつての侍たちは、士族という形ばかりの身分だけでは食べていけるわけがない。

商売を始めたり帰農したり、なんとか生活の糧を得ようと皆必死だったが中には悲惨な目に遭う者も少なくなかったのだ。

近江の旦那はそんな行き場のない士族らの面倒をみてやってもいた。

彼らのうちには食うに困って旦那の元で郵便脚夫を務める者もあり、草介もちろん共に働いている。

元来草介は侍を頭から莫迦にしていた。

威張るばかりで米一粒すら生み出すわけではなく、外国の脅威から国を守ることにすらできない。

しかも最後は薩摩やら長州やらにひっくり返されて、それまで何をしてきたのだからとんとわかりやしない。

だが、それでも旧幕府のために戦った侍たちには、ある種の畏敬の念を抱いていたのだ。敗けるとわかっていたかどうかは与り知れぬが、筋を通して命を懸けた者たちは本物の侍だと思っている。

もっともそうした人々は生き残ったとしても、さらなる苦汁を嘗めていることを草介は目にしてきた。

そしてそんなかつての侍たちが、近江の旦那の元に身を寄せてきているのだ。

彼らは一様に辞が低く、草介に対しても決して同格以下の扱いをする者はいなかった。いつの間にか草介が一番の古株になっていたことや、旦那がそうしたことを許さなかったためもある。

だがつい五、六年前まではまともに目を合わせることもすら憚られた侍たちが、あるいは草介を立て、あるいは教えを乞うなどして一緒に働いている。草介は実に激しく自尊心をくすぐられた。

彼らは長く勤めることはなく、いつの間にか脚夫の顔ぶれは入れ替わっていくのが常だった。

どこかで相應しい職にありついたのでろうと深く考えはしない草介だったが、しばしばこれが最後の仕事になる者がいた。

郵便物の通送中に賊に襲われ、金品を奪われて命を落とす者たちだ。

それ故の短銃装備だったのだが、つい先だっても脚夫の一人が戻ってこなかった。だが郵便は継ぎ立てして運ばねばならない。

悲しみも怒りも癒えぬ間に、旦那はどこからか新顔を一人、二人と連れてくる。

それで今しも草介たちが夜の通送に向かうという直前、最後の一人を伴ってばたばたと引き合わせたのだ。

「……ああ……！ 間に合った……！ これで夜継ぎに穴あ開けなくて済むよ……！」
 ぜえぜえと肩を上下させながら、心底安堵した顔を見せる旦那。

傍らには、草介からすると随分年寄に見える男が佇んでいる。燻した銀のような短髪に、同じ色の口髭。

「片倉隼人と申す」

男はきれいな姿勢で辞儀をしたが草介はけつ、と鼻白んだ。

大嫌いな、紀州の侍だったというからだ。

「紀州、ねえ」

草介は自分からすると随分と年嵩に見えるその男を、じろりと見やった。

上背はさほど高くはないが、頑健そうな体つきが制服の上からも視てとれる。

燦し銀の短髪も同じ色の口髭もきれいに整えられ、精悍な顔つきはむしろ若々しいとさえいえる。

珍しいのはその男の足元だ。この時代は郵便脚夫も草鞋履きが普通だったが、立派な革製の洋靴を履いている。

「おいちゃん、いいもん履いてんな」

「……紀伊の物にて」

「ふん」

草介の紀州嫌いに大した理由などはない。旧幕のために戦った者たちは別として、元々侍が嫌いなのは今に始まったことではない。

が、その中でも薩やら長やらが、官軍となった途端、戦いもせずに尻尾を丸めて降参した藩などは最も軽蔑すべき連中だと草介は思い込んでいた。

紀州というのは御三家でありながら、南海の鎮守を果たすことなく早々と降った腰抜けの筆頭格だ――。

と、頭から決めつけている。

なので紀州者だという目の前の男がひたすらいけすかない。

そのうえ言葉遣いは何やら垢抜けているのを質してみると、江戸定府で育ったため

だと素っ気ない答えでいよいよもって気に食わない。

「つんけんしなさんな、草介。片倉さんはねえ、若え時分にや紀州の七里飛脚だっ
たつてえんだよ」

七里飛脚――。

その名の通り七里ごとに書状などを通送する大名飛脚の一種で、御三家の紀伊と尾張、さらには松江・津山・姫路・松山・高松・福井・川越の各藩に設けられていた。

身分としては足軽や中間といった最下層の者らがこれにあたったが、重要文書の輸送はもとより周辺の情報収集なども担っていたという。

幕末には廃れていった役目ともされるが、紀伊では最後まで残っていたのだった。
「しちりしきやくだかなんだか知らねえけどよう。郵便担いですつ転ぶんじゃねえぞ、
おいちゃん」

さんざん悪態を吐いた草介だったが、いよいよ夜間通送への出発時間を迎えて大人しく旦那の切り火を受け、貸与された銃を身に着けたところだ。

本来、通るべき経路は定められている。しかしつい先頃の強盗事件で脚夫が命を落としていたのだ。

味をしめた賊が再び狙ってくるのは容易に予測できる。

そこで旦那を中心に、特に襲撃されやすいと思われる森の中については違う道をとるよう打ち合わせていた。

このことはそれぞれの脚夫と旦那しか知らない。草介と組んだ者も隼人の相方も、いずれもよく慣れた脚夫だ。彼らもかつて侍だったと聞いているが、草介にとつては気の置けない仕事仲間だ。

万全とはいえないまでもこれなら無事に郵便御用が務まるだろうと、草介は気楽な心持だ。

「では。早う御帰り」

二人一組の男たちがそれぞれ別の方角へと走り出し、遠ざかる彼らの背に向けて旦那がもう一度火打石を鳴らした。

草介は隣の男と息を合わせながら、拍子よく真夜中の地道を駆けていった。周囲はほとんど水張田で、望にはまだ少し早い月が田毎の水面に映っては揺れている。

灯りのない夜での月明りというものは、実に煌々と地上を照らす。森の入り口に至るまでは提灯など点けず、そのまま駆け続けた。

己の速さで起こす風がしっとりとした夜気を掻き分け、草介は心地よさげに目を細める。

やがて目の前に黒々と横たわる森が見えてきた。月明りに慣れた目からは、まことに黒としかいえないような塊に見える。

普段の道から離れ、旦那と打ち合わせた経路を慎重に見定めて森の口に足を踏み入れた。

「草介さん、念のためだ。もう少しばかり入り込んでから提灯を灯そう。賊に見つかったらしつこく追ってくるだろうから」

相方の男が声を潜めて提案し、火の点いていない提灯を草介に持たせて歩きだした。先を行く男が地面の枝葉を踏みしめる音を頼りに後をついていく草介だったが、まさしく真の暗闇で一寸先も見えやしない。

気が付くと結構な距離を無灯で進んでいた。もうそろそろ火を、と声掛けしようとした時、草介は前を行っていた男の足音が消えていることに気付いた。

ぞわり、と悪寒のような怖気が全身を駆け抜ける。

「なあ……おい……？」

声を殺して呼びかけた草介の額へ、ふいに硬く冷たいものが押し当てられた。

「動くな」

直後にはがちりと鳴ったのは、草介のよく知るピストルの撃鉄を起こす無機質な音

だった。

闇に紛れて顔は見えないものの、草介に向けられたその声は間違いなく相手の男のものだ。

「……冗談だろ」

信じられない思いでやつとそれだけ振り絞った草介の言葉は、かすれて上ずった。気心知れた仲間と思っていた男に、暗夜の森で今銃口を突き付けられている異常な事態。

笠をかぶっていないなかった草介の額に当てられていたそれは、ごりごりごと嫌な音を立てて半周した後頭部へと回り込む。

「荷を下ろして提灯を左側に出せ。妙な真似をするとこのまま撃つ」

真後ろからの冷え切った声に、草介は天秤棒に振り分けた荷をそっと置いて震える手で提灯を差し出した。

しゅつ、と擦過音が立った直後にほのかな灯りが瞬間闇を押しつけ、燐の焼けるような匂いと共に提灯へと火が移された。草介も持っていない舶来物の燐寸だったが、無論そんなことに気をやるゆとりなどあるはずもない。

「灯りを前に出せ。そのまま進め」

ごりつ、とさらに強く後頭部に銃を押し付けられ、草介は言われるまま歩を進めた。

銃口に向けられる力は時折右へ左へと変化し、無言のまま進むべき道を強制されている。

「なあ、お……」

「黙れ」

背を強かに蹴りつけられた草介は息が詰まり、つんのめりそうになりながら前へと進んだ。

「止まれ」

歩みを止めた草介は、すぐに違和感の正体に気が付いた。

それまで提灯でほんやりとでも照らされていた足元の道が見えない。そこだけ宙に浮いたかのように、先は光の届かない闇が蟠っている。

そこは断崖の端だった。

「餓鬼が。今までもうも顎で使うてくれたのう」

忌々しげに、だがどこか嘲笑うかのように男が毒づく。

「つい先頃までうぬらはわしにひれ伏す身だったのだ。ようも、ようも——」

男は呪詛の言葉を吐きながら草介の腰のピストルをまさぐり、抜き取って後ろへと放

り投げた。

銃口は尚強く草介の後頭部に押し当てられ、足元から礫いしが崖下へと滑り落ちる。

「あんたが、そんな……。賊だったなんて」

「飛び降りろ」

草介が絶望する声をもとめせず、男は言い放つ。

「飛ばねば撃つ。どのみちうぬが賊の一人ということになる。わしは褒美を頂戴して下賤たげなその日暮らしとは縁切りじゃ」

真後ろで見えないが、男が下卑た笑みを浮かべたのを草介は感じ取った。

先程から止まらぬ震えは初め恐怖ゆえのことであったが、今やその代わりに違う思いが草介を衝き上げている。

激しく哀しい、怒りの思いだ。

「提灯はよこせ。燐寸もタダではないのでな」

草介は言う通りにすうつ、と提灯を横に滑らせる。

と、不意にそのまま反転して力任せに提灯を男の横面に叩きつけた。

男が怯んだ一瞬の隙を逃さず、組み付いて手のピストルを片手で押さえる。

放り出された提灯は地に落ちて燃え上がり、二人の男を暗闇から浮かび上がらせた。

「鐵鬼が！」

引鉄が引かれ、草介の顔のすぐ側で火花と破裂音が響いた。

鼓膜が突き破られるかのような衝撃に身を竦めつつ、もう一度ピストルに手を伸ばす。

男が再び撃鉄を起こして発砲するより、ほんの刹那早く手が届いた。

撃鉄ごと両手で握り込んだため引鉄を引いても弾は出ない。草介はそのまま体重を預けるように倒れ込み、男の腕を外向きに捻り下ろした。

男はあつと声を上げ、腕を庇おうと反射的に身を浮かせる。草介は構うことなく、地に伏した身をさらに鋭く半回転させた。

腕の関節を極められた形で投げられた男は、真つ暗な虚空にその身を吸い込まれていく。

長い悲鳴が尾を引き、はるか下方で肉の潰れる音が鈍く弾けた。

まだ震えの止まらない草介の手には、男の持っていたピストルが銃口から薄く煙を出している。

提灯の残骸で小さく燃える火が、肩で息をする草介を照らしていた。

草介は暗夜の道を力の限り駆け戻っていた。

賊の正体だった男のものも含め、二人分の荷を担いでのことだ。

あまりのことにしばし放心していた草介だったが、ともかくも自身の成すべきことを成さねばならない。二人分の郵便をこのまま届けるか？ いや、この重さの物をこの暗闇で次の中継所まで運べはしまい。

そう思い至ると、草介はやおら立ち上がり気合を入れて二人分の郵便を担ぎ上げた。この距離なら元来た道を戻って取扱所に還^{かえ}った方が早い。旦那に報告して事後処理を考えてもらおう。

いや、そもそも旦那の身にももしかすると危険が及んでいるのではないか。何年も一緒に働いた仲間の脚夫が裏切者だったのだ。

片倉といった年嵩の新入りだつて今頃どうなっているかわかりはしない。草介は走った。早く、早く、一刻も早く。

荷の重さも、脚腰が上げる悲鳴も、無我夢中の草介には何も感じないに等しい。

使命感、といつては大袈裟だろうか。だが、この若者にとつて郵便配達はやただの身過ぎ世過ぎの方便ではなかった。書状や品物を託した人の思いがある。届ける先には、それを待っている人がいる。ならば、駆けねば。

戻りの道は存外にも短く感じられるほど夢中で走り、旦那の待つ郵便取扱所の小さな

灯りが見えるとさらに足を速めた。

「——旦那っ！ 旦那あつ!!」

息せききつて取扱所に駆け込んだ草介は、荷を放り出すと大声で呼ばわりながら執務の間へと向かった。

取扱所とはいつても元は少々立派な普請^{ふしん}の百姓家だ。土間から板の間へ上がって、旦那がいるはずの奥の間の戸を開け放った。

「おや、草介。何事だい」

薄明かりの下、洋風の執務机に向かった旦那が静かに顔を上げた。

表情はよく見えないが、遁送に出たはずの脚夫がほどなく一人だけで戻ってくるなど異常事態に決まっている。

草介は荒い息をつきながら事の次第を捲^{まく}し立てた。改めて恐怖と怒りが揺り戻してく

るが、旦那が頷きながら聞く様子に少しづつ落ち着きを取り戻していく。

「で、あいつの銃は」

ひとしきり状況を聞いた旦那がふいに問うた。

「これだよ」

草介は賊の正体だった男が残した銃を手渡す。

旦那が弾倉あつたを検めると、たしかに一発分が発射されている。

「おめえさんのほ」

「……抜かれて放り投げられたのを見つけたらんなかったです」

「そうかい」

旦那は溜息をつき、弾倉をかしやんと戻した。

「何てことだい、草介」

直後、がちやりと撃鉄が起こされ、あろうことかその銃口は草介に――。

「戻ってきちゃあ、駄目だろうよ！」

鋭く乾いた破裂音と共に、弾丸が放たれた。

だが草介は一瞬早く転ぶように飛び退り、身を低くして脱兎のごとく部屋から駆け出した。

心が認めようとしていなかっただけで、体は既に渦巻くような害意を鋭敏に感じ取っていたのだ。

続けざまにもう一発、今度は草介のすぐ側に着弾したが構わず土間まで走り抜ける。

壁際に積み上げられていた俵の陰に飛び込み、腰に隠していた自身のピストルを抜いて当てずっぽうに撃ち込んだ。

旦那には回収できなかったと言ったが、密かに拾い上げて忍ばせていたのだ。

どうしても考えたくないことだったが、戻りの道を走りながら思い浮かんだ疑念は拭うことができなかった。

長く務めた脚夫の裏切り、いつもの経路を変更した直後の襲撃。

これが意味するところは――。

そのおそろしい考えは、報告を聞く旦那のあまりにも落ち着いた様子から確信に変わっていた。

その疑念が、紙一重で草介の身体を反応させたといえよう。

積まれた俵の陰に隠れて、草介は事の成り行きに改めて恐怖が這い登る思いでいた。俵があるのは土間のほぼ中央。

走り出て外に逃げなくてはと思うが、その間に狙撃されるという直感が足腰を萎えさせている。

どうする、どうする、どうする――。

やがて板の間の奥から、元より忍ばせるつもりもない足音が土間に向かって這い寄ってきた。

もう一度威嚇射撃をして、その間に走り抜ける――。

そう決めて撃鉄を起こし、草介は板の間に向けて引鉄を引いた。しかしがちと素っ気ない音が立っただけで、何度試みても変わらない。六発あつた弾はすべて撃ち尽くした。

土間の暗がりのなか、積み上げた俵に身を隠した草介は己が心の臓の音のあまりの大きさにおののいている。

静かに……！ 静かに……！ あいつに見つかっちゃう……！

「草介や」

存外の近さから粘つくく囁くような声が降ってきて、草介は冷水を浴びせられたかのように縮みあがつた。

叫び声が漏れないよう、咄嗟に両手で口を塞ぐ。

「まったく、聞き分けのない子だねえ。ちよいと話をしようじゃあないかね。そうだ、大人しく言うことを聞いてくれりゃあ、粒銀を一握りあげよう。いや、二握りだつて構やしないよ。だから、ねえ」

暗闇に火が立ち、轟音が鳴り響いた。

男が放つた銃弾は、草介の頭上の俵を貫通して塵芥を撒き散らす。中身の米がざあああつと音を立てて零れ落ちた。

草介は、銃声に無意識の悲鳴を上げていた。

「おや、そこかい。女のような声で鳴くじゃあないか。ふつ、くくつ」

ざりつ、と近付いてくる足音に向かつて、草介は己を奮い立たせるように叫んだ。

「あ、ああ、あんたは、お旗本だったんだろ！ こんな……こんな……大事な郵便とか……銭とか……殺して掠め取るなんざあ、追い剥ぎと変わらねえよ！」

「ああそうさ。何が悪いってえ言うんだい。新政府の連中だけじゃあない。旧幕の間抜け共もみいんな追い剥ぎみてえなもんさね。お前さんに説法される覚えなんざあ……ないよ！」

もう一度銃が吼え、今度は草介のすぐ足元に土埃が立った。

「聞き分ける気がないなら、せめて楽に逝かせてやろうかねえ」

ガチャリと撃鉄を起こす冷たい音が立ち、旦那が草介へとさらに歩を進める。

と、その時。

突如として土間の木戸が蹴破られ、あまりのことに旦那は咄嗟にそちらへと銃口を向けた。

「誰だい！」

動揺のあまり放たれた金切声の先に、提灯の薄明かりで佇む男の姿が浮かび上がった。

草介と同じ、袖と裾に赤い線の入った紺の詰襟とズボン。葦笠の下表情は窺い知れないが、腰に巻いた晒さらしの帯には刀を差している。

ずいっと土間に足を踏み入れたその男は提灯を掲げ、深みのある声で朗々と、
「郵便でござる」

ただ一言、そう宣した。

「片倉あつ!!」

旦那が叫びながら発砲するのと、隼人が提灯を抛なつて身を沈めるのはほとんど同時に見えた。

あまりのことに身を凍めたままの草介だったが、にわかに我に返って叫んだ。

「弾ア今ので終えた!!」

隼人は低い姿勢のまま鯉口こいぐちを切り、刀の柄に手掛けして走り懸かった。

土間に降りていた旦那に向けて矢のように間合いを詰める。

「ちえええいつつ!!」

裂帛れつぱくの気合を発したのは、隼人ではない。

即座に残弾のない銃を捨てた旦那が、密かに携たづなえていた長刀を抜き放ちざまに斬り下ろしてきたのだ。

豁かっ、と刃金と刃金が噛み合う硬質な音が響き、暗い土間に火花が散った。

隼人が抜刀と同時に斬り結び、凶刃を斬り留めていた。

豁かっ、豁かっ、と二人は激しく白刃を撃ち合わせ、続け様に火花が舞っては刹那に消える。地に落ちた提灯がようやく燃え上がり、戦う男たちを照らした。

「いいいええつ!!」

旦那が大きく水平に太刀を薙ないだ。

が、隼人は刀身を体側に立てるようにして受け止める。

しかし旦那は留められた刀をそのまま強引に手元に引き寄せた。

瞬時に刃を上向かせて腰溜めに構え、絶叫と共に体ごと突き込んだ。

「えあああつつ!!」

突きが今しも胸に達しようというその瞬間、隼人は鋭く足を引いて半身になった。

それと同時に刀身を斜め下に払い落とす動作で、一個の質量となって殺到する突きを擦り流した。

擦過する刃と刃が悲鳴を上げて、細く長い一条の火花となって零れてゆく。

剣戟けんげきの気迫に動きの止まった草介だったが、その光景をただただ美しいと感じていた。渾身の突きを流された旦那は重心を失い、反射的に踏鞴たたらを踏んだ。

その瞬間隼人は片足立ちとなり、旦那の胸に強烈な横蹴りを突き刺した。無理に制動した速度と自重に加えての衝撃は何倍もの力となる。旦那は固太りな身体を一間ほど飛ばされ、仰向けに土間へと打ち付けられた。

なんとか剣は手離さずにいるものの、息が詰まった旦那は腹を押さえて呻くばかりで立ち上がることはできない。

隼人はゆっくりと自分の刀を鞘に納めると、落ちて燃え尽きかけていた提灯の火を壁際に掛けられた燈明皿へと移す。

小さく安定した灯りがぼうつと点り、隼人は制服の内隠しから一通の書状を取り出して薄明かりに広げた。

「代読御免——」

草介は眼前の剣戟にすっかり魂を奪われる思いであったが、洪みがかつた声で朗々と読み上げられるその文に耳を澄ませた。

「元小普請、与田平右衛門 此ノ者ノ儀、兼テ賂に依り家中有為ノ士ヲ賣リ——」

草介は音読される文の内容に聞き覚えがあった。

これは……斬奸状だ。

斬奸趣意書とも呼ばれるこれは、誅殺した者の罪状やそれに至った理由や思うところ

を文章にしたものを指す。

幕末には大いにしたためられ、晒し首に高札として添えられたものもあった。

旦那はやはり旗本だったが、動乱期には反幕勢力と通じて金銭と引き換えに仲間の情報を通していたことがこの書状で糾弾されている。

出された年は維新の直前。この文はこれまで届くことなく、旦那は生き延びていることから何があったのか推し量れるだろう。

ひとかどの人物だと信じていた。今自分がこうして生きているのも、旦那が拾ってくれたおかげだと思っている。

しかし郵便物の強盗を裏で手引きし、幕末の時代から仲間を裏切り続けていたという事実が、草介を言いよわないやるせなさで包んでいた。

「——不届キ之至リ捨テ置クベカラザル之罪ニ附キ、天誅ヲ加ヘ候。依ツテ此クノ如ク也。——有志中」

読み終えた隼人は書状を元のように畳み、旦那へと突き出した。

苦痛に顔を歪めながらも上体を起こした旦那は、刀を杖代わりにぐぐつと立ち上がる。「それがしにそこを斬るいわれはござらぬ。この文を持って戸長に出頭するか、我らを斬って逃げおせるか」

いかがか、と迫る隼人に旦那は口の端を吊り上げた。
 「おめえ、御留郵便…… 劍客通信」か……。七里飛脚だかなんだか知らねえが……。足軽風情が！ しゃらくせえんだよおっ!!」

残る力のすべてを振り絞るように、旦那が雄叫びと共に真っ向から斬り掛かった。

納刀していた状態の隼人の頭上に白刃が迫り、不意打ち同然の攻撃に草介は息を呑んだ。

が、その刃が面に至ろうかという刹那、急速に抜刀した隼人は棟に左手を添え鳥居の形でがっちりを受け留めた。

直後に柄を握る右手をふっと下げると、力の込められた旦那の刀が斜め下へと流され、その体ごと前のめりに崩れていく。

隼人は間髪容れず敵の首筋に刀身を当て、腰を軸に半回転しつつ鋭く旦那を引き倒した。

首を斬った――。草介の目にはそう見えたが、数瞬のちも血は噴き出さない。

隼人は刃ではなく刀の平の部分を押して引いたのだ。

だが技を受けた本人も斬られたと錯覚したのだろう。旦那は俯せに倒れたまま気を失い、ぴくりとも動かなくなっていた。

隼人はひゅんつと刀を体前で斜めに払う血振りの動作から、淀みなく鞘へと納めた。
 「お、おいちゃん――」

震えながらやつと声を出した草介だったが、言うべき言葉が見付けられない。

口をついて出たのは、自分でも笑ってしまうようなことだった。

「そ、それ……なんて技？」

隼人は草介を見下ろし、ぴくりと片眉を上げた。

「無陣流、むじりゅう、あまつみ雨障」

折しも掻き曇っていた夜空の果てに稲光が走り、無数の雨粒が寄せてくる音が響いていた。

第二章 博徒の雛と老劍士

「片倉さんよう、まだ着かねえのかい」

「もう間もなく着く」

「それさつきも言つてたじゃねえかよう……」

命を救つてくれた老郵便脚夫の隼人に、行き掛かり上付いていくことになつた草介。

配達任務のために長距離をゆくのは当然としても、隼人の脚の速さには驚きを通り越して辟易してしまふほどだ。

脚の強さには自惚れでない自負がある草介だったが、倍ほども年齢の違ふ男に追従しきれず何度も息をつかねばとても走りおおせない。

特に傾斜のある山道では大きく距離を引き離されることも度々だ。草介が追い付くまで燻銀の口髭を悠々と風に当てて待っている隼人の様子を遠目に見つつ、何やら腹立たしい気持ちすら湧き上がる。

そもそも草介は、かつて侍と呼ばれた連中が好きではない。

正確に言えば旧幕時代の隼人は十分ではなく卒分そつぶんだったのだが、つい先頃まで刀を差していて語尾に「ござる」などと付ける奴はみな気に食わないのだ。

が、信じていた郵便取扱役の旦那の悪事を暴き、殺される寸前だった草介を白刃いっせんの一閃のもとに救い出したのが隼人だ。

その技と佇まいは、ただただ圧倒的に格好良かったのだ。

そう思つてしまふ自分自身も何やら認めたくなくて、草介は子どものように歯噛みする。

ともあれ、化物のような脚に付いていこうと必死で駆ける毎日だった。

もう一つ草介を打ちのめしているのは、配達中に遭遇する賊の多さだ。

郵便脚夫は手紙だけではなく金品も運ぶことから、それを狙つて不届者の襲撃を受けることが珍しくない。

また、深い山中の道を往くことも多く、頻繁に野生動物に出つくわすのだ。

おとなしい生き物ならばともかく、野犬や熊、気の立った猿や猪に鉢合わせると命が危ない。

こうした様々な障害から郵便物を守るために拳銃所持が認められているのだが、これは決して己の身を安んじるものでないのはよく理解している。その証拠に、配達が終了

した状態での発砲は許可されていない。つまりは襲われても自力で何とかせよとの官からのお達しである。

「つまり死ねることじゃねえか」

「そういう見方もできるな」

一度叫ぶように愚痴を吐いた草介に、隼人は片眉をぴくりと上げてそう答えた。

通常の郵便配達業務ですら相当危険であるが、どうやら隼人が就いているのはさらに厄介な任務だということが草介にもわかってきた。

御留郵便御用掛——。

幕末の動乱で届かなかった書状や品物を、本来受け取るはずだった人々の元へ届ける特務機関だ。

察しの通りその内容は平穩なものばかりではなく、どちらかというところ平穩ではないものの方が多い。

そのため、隼人のような練達の剣士がこの任を務め、いずれも銃に加えて日本刀の携帯と使用を許可されている。

ゆえに彼らは、誰ともなく「劍客通信」と呼ばれているのだ。

この特殊な郵便配達任務では届け物である書状や品の受け取りも、通常の方法による

ものではない。

行商や山伏など移動する職能者に扮した局員や、郵便以外の業態に偽装した商人などがこれに当たっている。

渡す側にとつても相当な危険を伴うためで、劍客通信を陰から支える多くの協力者がいるのだ。

が、草介はまだ刀など持たせてもらっていない。

いわば見習いの丁稚みたいな身分だろうと得心はしている。だが、いざ賊と戦わねばならぬ際、天秤棒を振り回すか下手な拳銃をちらつかせることしかできない自分への焦りもあるのだ。

なので隼人と行動を共にするようになってほどなく、草介は劍術を教えてほしいと頼んだのだった。——が。

「なあ、片倉さんよう。おいらにもそのヤットウ教えてくれよ」

「断る」

「ことわ……!? なんで？」

「お前に刀は持たせん方がよい気がする」

「んなことたねえよう！ だって山賊みてえなのすげえ襲ってきやがるじゃねえか。おい

らだつて強くなりてえんだよう！」

「強くなりたいか」

「おうともよ」

「お前は危険に対して良い勘をしている。それを研ぎ澄ませるべきだ」

「勘もなにもねえよう。育ちわりいからよ、ガキの時分から周りでケンカ始まりそうなたら肌がピリピリすんだよ」

「ほう」

「でもいつつもじゃねえしよう。御留郵便のおつとめにゃあ、役になんか立たねえよう」
「なれば儂の動きを真似るのは勝手だ。手取り足取りは教えぬ」

これは前に辻講釈かなにかで聞いたことがある。

武芸の師匠が何も教えないようできて、実はその日常の一挙手一投足が極意に通じる動作なのだ。

きつとそうに違いないとさつそく隼人の動作を観察しだした草介だったが、規律正しい日々の身ごなしに特別なことはない。

ただ、時折り隼人は両の掌を重ねて立木に押し当て、ぐつと力を込める動きを行っていた。

すわ何かの技の稽古かと思つて瞠目するが、その後腰を伸ばしてぼんぼんと叩くのでただの体操らしい。

「くそつ、おじいちゃんめ……」

業を煮やした草介は何度か相撲を挑んだのだが、その都度きれいにのされてしまう。

ぶちかまして突っ掛ければ内無双で一間ほどすつ飛ばされ、組もうとすると手首の絡を押さえられて激痛に悲鳴を上げた。

かくなる上は思い切り殴りかかってみようかとも思うが、本気で殴り返されそうなのでそれはやめておいた。

ともかく何をしてもしも歯が立たず弟子入りも叶わず、隼人の日常からもまったたく技らしいものを盗めない。

さらには隼人と常に行動を共にするうち、その謹厳な立ち居振る舞いに息苦しさを覚えることもある。

元が野放図に育った博徒の雛たる草介だ。せいぜいが鉄火場の見張り程度の三下だつたが、隼人とは水と油ほどに個性が違う。

なので、配達任務を終えてしばし好きに町を歩く許しが出るのが、羽を伸ばす貴重な機会なのだ。

この日やつと目的地に着いて書状を届けおせ、隼人から町歩きの許可が出た。いちいち何をして遊ぶかまでは詮索しないものの、余程草介に信用がないものとみえて隼人は口を酸っぱくして繰り返す。

「よいな草介。住民と揉めるな。酒を過ぎすな。無駄遣いするな。悪所で汚く遊ぶな。女を泣かせるな」

「うるせえなあ、わあつてるよう。毎度毎度おとつあんかよう」

「出立にも遅れるな。置いてゆくぞ」

「へいへい。とつあんも按摩なりしてもらえよ」

ひらひらと手を振りながら隼人と別れた草介が向かう場所は、いつも決まっている。鉄火場だ。

知らない町でも旅人が行き交うちよつとした宿場なら、必ずどこかに賭場が立つ。

かつては町奉行の管轄外だったことから無住の破れ寺などで開帳されたものだが、明治の世になつてもその伝統は続いている。

博徒の嗅覚で嗅ぎ当てる鉄火場に、ふらりと立ち寄る。

特に見張りの三下もない小規模な賭場だったが、やはり丁半博突の賽が振られていた。

作法通りに丁の目が出るのを待って入場し、席に滑り込んだ。

盆莫塵を囲んで、場を仕切る中盆がツボ振りに合図を送る。諸肌を脱いで鯉の刺青も鮮やかな男が「ツボ入りやす」と宣言し、賽を入れたツボを右手で盆莫塵に伏せた。

左の手は即座に大きく開いて掌を見せる。イカサマはないという証だ。

そのままツボを前後に三回動かして、中盆の「どっちもどっちも」の声で客が一斉に賭け出す。

丁か半かの二つに一つ。草介は丁に張った。

「コマそろいやした」

すべての客が張ったのを見届けた中盆の声を受け、ツボ振りが左手を盆莫塵に伏せる。これも以降の小細工ができないようにする措置だ。

「勝負！」

ツボ振りが、ツボを開く。

「ピンゾロの、丁」

うっし！と草介は小さく拳を握り締めた。初っ端から当たるのは珍しい。こういう時は上手くいく気がするものだ。

その後も丁にこだわった草介はツキにツイた。

が、博徒の雛だっただけあって引き際も心得ている。イカサマのない博奕であっても、何の因果かおそろしいほどツギが巡る奴はいるものだ。

だがそういう人間は場を荒らしてしまいうえに、後々厄介事になりやすい。

そこで胴元がサシの勝負を持ち掛ける場合があるが、それはつまり「お引き取りを」の意味なのだ。

そうなる前に退場した草介は、ほくほく顔で宿場の賑やかな方へと戻っていった。

懐は実に温かい。酒でも飯でも女でも、骨休めには充分過ぎる実入りだ。

「あのう、もうし」

上機嫌ですっかり油断していた草介は、突然声をかけられて飛び上がった。

すわ懐の金の臭いを嗅ぎ付けて来やがったかと身構えたが、目の前には身なりのいい紳士が。

上等な羽織袴にバナマ帽、丸い眼鏡に八の字に下がった眉がお人好しな印象を与える。

「急に相済みませぬ。実は先ほどの丁半を覗いていた者でございまして……。いやあ、お強いですねえ。小生、貴方様の男らしい張りぶりに感服いたしました」

突如として紳士に博奕の腕前を褒めそやされ、あれよあれよという間に高そうな料亭

立ち読みサンプル はここまで

に上げられた草介。ふかふかの座布団で上座に据えられ、いつの間にか調えられた膳の前で美人どころの酌を受けている。

幫間がどっと笑を取る。三味線に合わせて艶めいた踊りが披露される。

どこから湧いてきたのかよくわからない人々が大勢いる。

だがまあ、そんなのは取るに足らない些末なことだ。

すっかり気が大きくなった草介は、差されるままに盃を干して御大尺となっていた。

「先生、どうぞもう一献」

最初に声をかけてきた紳士が、下座からにじり寄って銚子をすすめた。

草介も鷹揚に差し返し、紳士は押し戴くように返盃を受ける。

「時に先生、ご相談がございまして」

「おう、なんだい。なんでも言ってくんな」

気持ちよく酔っている草介は、先生と呼ばれてもまったく疑問を感じない。

「お恥ずかしながら小生、丁半をやってみたいもの……ああした鉄火場にはまだ恐ろしくて入ったことがないのです」

「なんも、怖えことなんぞねえよう」

「そこでこれお強いの強い方に、丁半の真似事で稽古をつけて貰っているのです」